

事項	大豆「おおすず」のべと病罹病種子の形成・混入を低減させるための薬剤散布時期及び種子調製法		
ねらい	大豆の主要品種「おおすず」で最も発生の多い病害であるべと病を対象に、種子伝染による発生被害を軽減させるための方法を検討した。その結果、罹病種子の形成低減のために効果的な薬剤散布時期と、罹病種子の混入低減のために効果的な種子調製法が明らかとなったので参考に供する。		
指導 参考 考 内 容	<p>1 「おおすず」のべと病罹病種子の形成を低減させるための薬剤散布時期</p> <p>(1) 莢がべと病に感染する時期は開花期の10～25日後頃で、特に10～20日後頃に感染しやすい。</p> <p>(2) 開花期の10～20日後頃で、なるべく降雨日前後に薬剤散布を1回行うと、べと病罹病種子の形成を効果的に低減させることができる。</p> <p>(3) 降雨日から離れた散布では、開花期の10～20日後頃の散布であっても、べと病罹病種子の形成を低減させる効果が下がる。</p> <p>2 「おおすず」のべと病罹病種子の混入を低減させるための種子調製法</p> <p>(1) 基準ふるい目の7.9mm目でふるうと、べと病罹病種子総数の3～6割程度が混入する場合がある。</p> <p>(2) 最初に8.5mm目でふるってべと病罹病種子総数を下げた種子(7.9mm目でふるった場合の6～9割減)に、不足分として残りを7.9mm目でふるって選別後に補うようにすると、種子用・出荷用ともに、べと病罹病種子の混入を効果的に低減させることができる。</p> <p>(3) 種子へのべと病罹病種子の混入がきわめて少なく、さらに周辺圃場での発生の影響が小さければ、初発後の薬剤散布をしなくても、開花期頃まで葉での発生は少ない。</p>		
期待される効果	薬剤の適期散布と耕種的な方法となる種子調製法を組み合わせることで、大豆のべと病による被害が軽減され、安定生産に寄与する。		
利用上の注意事項	<p>1 本資料は平成20年3月1日現在の農薬登録に基づいて作成した。</p> <p>2 農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報」(http://www.maff.go.jp/nouyaku/)を確認すること。</p>		
担当部署 (担当者名)	青森県農林総合研究センター 病害虫防除室 (岩間俊太)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成17～19年度 青森県農林総合研究センター試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

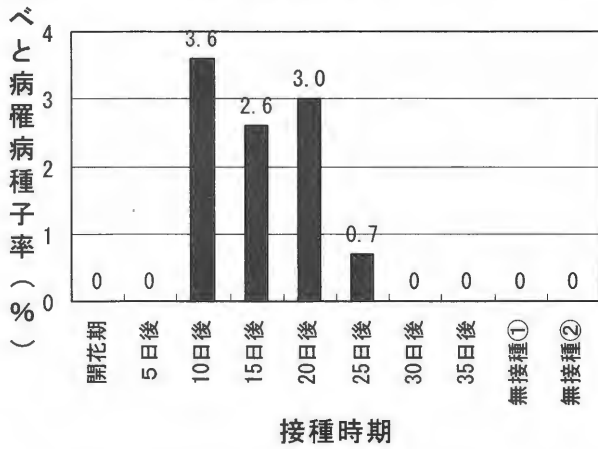


図1 莢がべと病に感染しやすい時期(ポット試験)
(平成19年 青森農林総研)
(注) 品 種：おおすず (図1～4 共通)
播種日：6月22日 開花期：8月7日

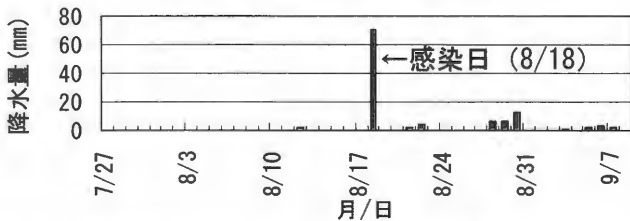
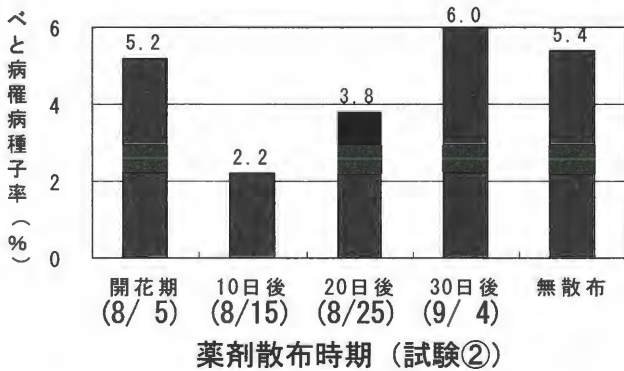
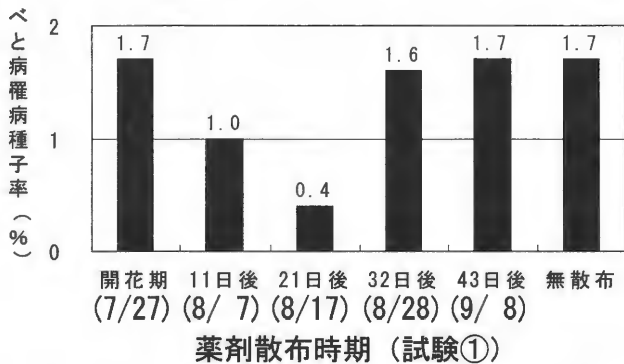


図2 薬剤散布時期とべと病罹病種子率との関係
(平成18年 青森農林総研)
(注) 試験場所：青森農林総研田中圃場
播種日：試験①5月26日、試験②6月12日
供試薬剤：アミスター20フロアブル
降水量：アメダス値 (黒石)

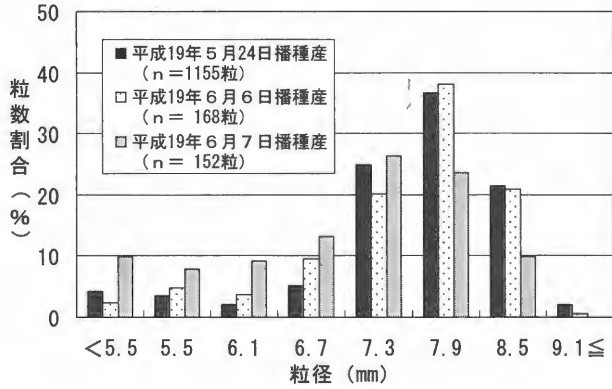
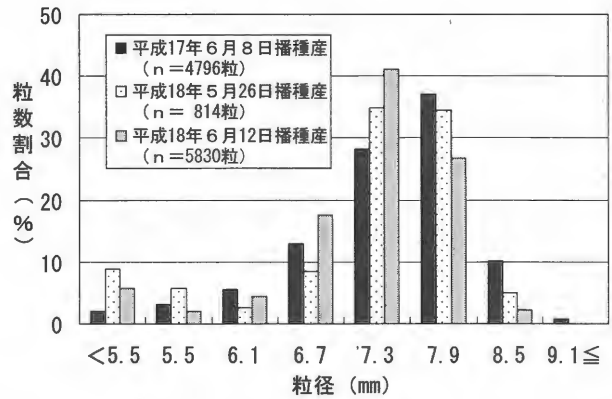


図3 べと病罹病種子の粒径分布
(平成17～19年 青森農林総研)
(注) 試験場所
平成17年 青森農林総研境松北部圃場
平成18～19年 同田中圃場

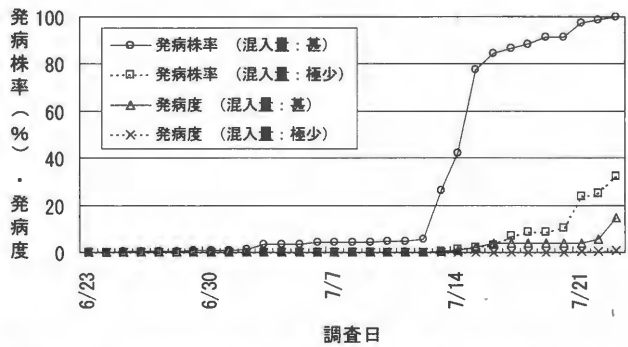


図4 べと病罹病種子の混入量の違いによる播種後の発生差 (平成19年 青森農林総研)
(注) 試験場所：青森農林総研田中圃場
播種日：5月24日 開花期：7月22日
初発日：混入量が「甚」の区 6月25日
混入量が「極少」の区 7月13日